

グローバルな正義を実現するための動機に関する研究 : リベラル・ナショナリズム論の改善を目指して

藤原, 拓広

<https://hdl.handle.net/2324/7329549>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 藤原 拓広

論文名 : グローバルな正義を実現するための動機に関する研究
——リベラル・ナショナリズム論の改善を目指して——

区 分 : 甲

論文内容の要旨

本稿の目的は、グローバルな正義を実現するための動機について考察することとおして、リベラル・ナショナリズム論を改善することにある。一般的な人々がグローバルな正義実現に貢献したいと思えるような理論を構築することで、そうした動機づけの問題の検討の不十分さを指摘されてきたリベラル・ナショナリズムの議論をよりよいものとすることを目指している。

第1章「問題状況——一般的な人々を動機づける必要性」では、そもそもなぜ政治哲学とくにグローバルな正義論において動機づけの問題の検討が必要なのかを明らかにし、その動機づけは主として誰を対象としたものでなければならないのかを論じている。メタ倫理学におけるヒューム主義やヨラム・ハズニーによる政治哲学の類型化を参照しながら動機づけの問題は政治哲学における根本的な問題の一つであることを示したうえで、動機づけのための議論は一部の英雄的な人々ではなく大多数の一般的な人々を主たる前提としなければならないことを提示している。

第2章「リベラル・ナショナリズム論の課題」では、リベラル・ナショナリズムに基づくグローバルな正義論の問題点を明らかにし、それをいかにして改善していくべきかについての若干の考察をおこなっている。デイヴィッド・ミラーのいう「正義をめぐるズレ」を少しでも狭めていくためには、動機づけの問題の検討のほか、国内的な社会正義とグローバルな正義との関係性の再検討やナショナル・アイデンティティの性質の再考が必要だと論じている。

第3章「コスモポリタンによる動機づけの理論」では、コック・チョル・タンの議論を中心にコスモポリタニズムの論者による動機づけの議論の批判的検討を、第4章「リベラル・ナショナリストによる動機づけの理論」では、パティ・タマラ・レナードの議論を中心にリベラル・ナショナリズムの論者による動機づけの議論の批判的検討をおこなっている。どちらの議論も参考にすべき点はあるものの、一般的な人々を動機づけるには不十分であると批判している。

第5章「一般的な人々は何によって強く動機づけられるのか」および第6章「ナショナル・アイデンティティの明瞭化の条件」では、実際に動機づけのための理論を構築している。本稿が提示する動機づけの理論の骨子は、以下のようなものである。まず、一般的な人々を強く動機づけるには自己利益に頼ることが有益だと思われるが、そうした人々にとってのとりわけ根源的な自己利益は個人的アイデンティティが円滑に明瞭化されることにあるのではないだろうか。もしそうであれば、個人的アイデンティティの重要な構成要素とは何かが問題となるが、私はそれはナショナル・アイデンティティであると考え。では、そのナショナル・アイデンティティはいかなる条件のもとでより円滑に明瞭化され得るのか。そのネーションが国内で良心および表現の自由を保障し、福祉や教育の制度を整え、ナショナルな自己決定を達成していることも必要だが、それだけでは十分ではない。ナショナル・アイデンティティは関係的なアイデンティティであるゆえに、あるネーションのアイデンティティの明瞭化には他のネーションからの影響が不可欠なのである。だとすれば、地

球上のあらゆるネーションがその国内で良心や表現の自由の保障といったような条件を満たし、彼ら自身のアイデンティティをある程度明瞭化できる環境にあることが必要となる。そのような世界を創り出すためには、ミラー的なグローバルな正義（基本的人権の保障、搾取の禁止、ナショナルな自決の達成の援助）の実現が求められるのである。すなわち、ある人がみずからのアイデンティティを円滑に明瞭化したいと考えるならば、その人の所属するネーションのアイデンティティが十分に明瞭化されていることが不可欠となるが、それにはその他のあらゆるネーションもそのための条件を整え一定程度彼ら自身のアイデンティティを明瞭化できていることが必要なのである。このように、個人的アイデンティティとグローバルな正義とはナショナル・アイデンティティを媒介としてつながっているものであり、このことはグローバルな正義を実現するための動機となるのではないであろうか。

第7章「リベラル・ナショナリズムから導きだされる動機づけの理論」では、以上のような議論を整理したうえで、それがリベラル・ナショナリズム論と一貫したものであり、その理論的發展に寄与していることなどを示し、投げかけられ得る批判への応答を試みている。